

加藤 千明 (愛知)

株式会社 グランデコール 本社

〒465-0093 名古屋市名東区一社2丁目165 1F TEL052-701-0006 FAX052-701-0051

グランデコール名古屋ヒルトンプラザ店

〒460-0008 名古屋市中区栄1-3-3 名古屋ヒルトンツグ 3F B1F TEL052-231-1223 FAX052-222-3210

FISBA GALLERY 名古屋

〒460-0008 名古屋市中区栄1-3-3 名古屋ヒルトンツグ 3F B1F TEL・FAX052-203-1026



200年以上の歴史を誇るスイスのファブリックブランド「クリスチャン・フィッシュバツハ」日本では「フィスバ」の名で知られています。伝統とコンテンポラリーを融合した素晴らしいファブリックは、世界で広くオートクチュールと称賛されてきました。

この度、クリスチャン・フィッシュバツハ社とタイアップさせて頂き、名古屋ヒルトンプラザ内に既存店とは別に中部地区唯一の「クリスチャン・フィッシュバツハ ギャラリー」をオープンさせて頂きました。

ハイクオリティーでエレガントなファブリックを是非ご堪能ください。

彩が変われば、生活が変わる。

CURTAIN

クリスチャン・フィッシュバツハ社デザインスタジオでは、専属クリエイターが所属し、全てのコレクションの企画・開発をしています。インテリアファブリックよりファッションファブリックの歴史が長いことから、ファッションの分野の影響が強く、時代の感性をいち早くとらえていることも、フィスバのカーテンの特徴です。

BED LINEN COLLECTION

ベッドリネンは最高級素材と緻密なプリントでその名を知られています。スイスが誇る最上級クラフトマンシップの象徴、スイスコットンを用いた100%使用したベッドリネンは、プレミアムな超長繊維綿が使われています。これは世界で生産されるうちのたった3%の最高級綿であり、これこそがクリスチャン・フィッシュバツハの求めるクオリティなのです。

CARPETS

昨今フィスバのラグ、カーペットの人気は高く、その勢いはカーテンを凌ぐほど年々需要が高まっています。



メリノトレジャー、リネンドリームズ、シルクシークレット、ミックスナチュラルから素材をお選び頂けます。

また、2009年世界で初めてのリサイクルインテリアファブリック「BENUコレクション」を

発表しました。ペットボトルをはじめ、ファッション業界で廃棄されたコットンやウール、海洋廃棄物をリサイクルした糸によるカーペットコレクションです。

ご提案から採寸、打合せ、施工までしっかりと対応させて頂きます。既存店同様、皆様のご来店を心よりお待ちしております。

建築確認検査、住宅性能評価、

住宅かし保険、構造計算適合性判定、

省エネ適合性判定などの業務を行っています。



一般財団法人 愛知県建築住宅センター



CONTENTS

法人協定会通信 62

株式会社 グランデコール ————— 表紙裏
加藤 千明

地域会だより ————— 1

連載【隔月 全6回】建築とデジタル技術の承前啓後
第1回 - 古くて新しいデジタル技術(前編) - ————— 2
水谷 章啓三重発:教育支援活動
三重短期大学生生活科学科住居環境コース 出前授業 4
服部 昌也三重発:建築文化講演会2023
「建築というきっかけ」～講師:永山祐子～ ————— 5
村林 桂Report
NAGOYA Archi Fes (NAF) 2023卒業設計展 開催 — 6
恒川 和久私の仕事 07
豊橋スカイ眼科 ————— 7
長屋 榮一自作自演 256
歌って踊れる建築家 ————— 7
中川 竜夫保存情報 第256回
データ発掘: 兒子八幡社 ————— 8
谷口 元編集後記 ————— 8
富田 彰次・伊藤 彰彦コルゲートハウス「川合健二郎」報告 その4 ————— 9
伊藤 幸子・齋藤 正吉・上原 徹也

地域会だより 今後の予定

■JIA東海支部
・5/31 2023年度通常総会■JIA静岡地域会
・5/15 総会 静岡市産学交流センター(ペガサート)
総会:13:30～ 記念講演会:15:00～17:00
・5/25 静岡地域会役員会の開催(WEB併用)■JIA愛知地域会
・5/31 第12回役員会
・5/31 愛知地域会通常総会■JIA岐阜地域会
・5/18 第1回役員会 18:30～20:30■JIA三重地域会
・5/19 第2回役員会 WEB会議

Bulletin Board

講演会

(公社)日本建築家協会 東海支部静岡地域会 2023年度総会記念講演会

自然とつながる建築をめざして

～『環境シミュレーション建築デザイン実践ガイドブック』と近作について～

講師/川島範久氏

建築家、博士(工学)、明治大学准教授
株式会社川島範久建築設計事務所代表取締役

会 期:2023年5月15日(月) 15:00～17:00

会 場:静岡市産学交流センター
6階プレゼンテーションルーム (Zoom配信あり)

参加費:無料

定 員:会場80名(先着順)・Zoom 100名(〳)

C P D:2単位(申請中)

■お問い合わせ/JIA静岡(※メールでお願いします)
jia-shizuoka@hyper.ocn.ne.jp

会場参加申込



Zoom 参加申込



表紙 常滑の景色……②「祭り」

建築家大会会場の一つ、INAXライブミュージアムのある常滑地区には6台の山車があり、4月15日からの春まつりには、祭のある広場に集結します。表紙は奥条区の常石車。知多型と言われる山車で車輪(ゴマ)が台輪の内側にあります。組立時に台輪とゴマのクリアランスを議論しています。建造された時は、簡素なものでしたが、寄進を受けてきれいに飾られていく、区民のシンボルであり継承する理由の一つです。年寄から若者までが話し合い繰り返される祭り、羨ましいです。

浅井 裕雄 (JIA愛知)
裕建築計画

古くて新しいデジタル技術(前編)

□デジタル技術の因果

いわゆる情報革命以降、社会とコンピュータの繋がりにより密接化し、デジタル技術は社会生活を支える存在として身近になった。最も縁遠いと思われていた第一次産業においても、ロボット技術やICTを活用したスマート農業をはじめ、デジタル技術の導入が進む。本機関紙の読者には言うまでもないが、建築分野でもあらゆる場面でデジタル技術の支援なしには成立しえない状況となって久しい。

こうした建築とデジタル技術のつながりは、コンピュータが登場した1960年頃からはじまる。それ以降、1980年代にCADが一般化していった頃の現象のように、時折注目を集めては議論されてきた。ここ10年ほどは、BIMを中心としたコンピュータ利用の取組みとして建築におけるデジタル技術の応用が着目される。先に、時折と書いたのは手描きからCAD、手計算からコンピュータ解析への移行のように、生産性や計算効率をあげる方法としてデジタル技術が享受されてきた一方で、デザイン手法としての応用は空転状態が続いてきたように思うからだ。デジタル技術の発展と革新の度に、それに触発された奇抜なデザインが提示され、時には設計プロセスの効率化など利点についても同時に議論されてきた。しかしながら、そこで提示されたデザインは、デジタル技術を応用することで創造可能となった形態などデザインの表層的な部分を模倣したに過ぎないマネエリスムに陥りがちで、大方から一過性の流行として扱われることが続いてきた。

□デジタル技術史の必要性

建築に限らず時代ごとに瞬間的に流

行したデザインは存在し、こうした建築デザインの遷り変わり方に関しても何もコンピュータの影響のみに限ったものではないだろう。筆者がここで問題としたいのは、デジタル技術を用いたデザインが、デジタル技術の発展との関係において、これまでに正当な評価の場を与えられずに曲線や複雑な形状を生成することだけが目的と見なされたまま埋もれてしまっているのではないかという点である。

建築史家レイナー・バンハムは「第1機械時代の理論とデザイン」(1961)において、技術の進展が近代建築のデザインに与えた影響を明らかにした。バンハムによって近代建築と技術発展の関係が歴史化され体系的に理解されたように、建築では歴史が分野の現在地を指し示すジャイロスコープとなってきた。これと同様に、デジタル技術の進展が建築デザインに与えた影響を歴史的な視点を合わせながら議論することで、その良し悪しが一過性のものとしてではなく正当に評価され、現在地が見えてくるはずだ。

2021年に「建築情報学へ」という書籍が建築情報学会設立に際し刊行され、小見山陽介によって歴史的な視点からデジタル技術と建築の現在地を示す試みが「建築情報史試論」としてなされた。筆者は建築史家ではないためバンハムや小見山のように体系的に示すことはできないが、小見山の「建築情報史試論」ではあまり扱われなかった我が国における建築とデジタル技術の関係をこの連載ではまず整理してみたい。そのために、今回と次回の連載で日本のコンピュータ利用黎明期の状況と、今日的にみても参考とすべきその理論についてまず整理していく。

□技術導入と学際的な展開

筆者がここ15年くらいかけて、興味をもって集めてきたコンピュータと建築に関連した書籍、雑誌類を本棚から出して並べてみた。建築とデジタル技術に関して、研究としてまとまったものが発表される機会は多くなかったものの、国立国会



図書館サーチも含めて俯瞰してみると、1970年頃から専門雑誌等においてコンピュータと建築の関係が扱われ、1995年以降はインターネットの普及を背景に社会との関係も合わせて扱われてきていることがわかる。

学術的な方面では、1960年代から関連した研究論文等が散見され、研究・設計・施工の分野で盛んにコンピュータが使われ始めた1978年6月に日本建築学会において電子計算機利用懇談会が作られている。その2年後の1980年5月より電子計算機利用委員会として本格的活動を行う委員会が設立されており、我が国の建築分野におけるコンピュータ利用の学際的な広がりはこちらからはじまったといえる。

具体的な導入事例は、他の分野と同様にまず計算機として導入されたため、構造計算においてデジタル技術が用いられることから始まった。日本で構造計算にコンピュータを取り入れた第一人者は東京工業大学で構造設計に携わり、構造計画研究所を設立した服部正であった。構造計画研究所は1961年に日本で初めて構造計算にコンピュータ(IBM 1620)を実用した企業で、その後もOSの開発協力、ソフトウェア開発ビジネスを開始するなどした。構造計算に次いで日影計算などの設計条件に関するシミュレーションが普及し、建築の設計段階とリわけ計算の問題に対してデジタル技術の導入が試みられていった。

□デジタル技術における苦難

計算の問題として導入され実用化も早かった構造計算のような問題に比べ、今日でいうAIのような「知」や「創造」に

関連したデザイン領域へのデジタル技術の応用は遅れていた。この問題について先の服部は1973年にそれまでの15年のコンピュータ利用を振り返り、「処理のアルゴリズム化」と「思考のアルゴリズム化」の二つに分けてこの問題を指摘している。ここで服部は「処理のアルゴリズム化」=エンジニアリングに比べ、「思考のアルゴリズム化」=デザインにおいてそれが発展していないことを指摘した。

今日的にみれば、当時のデジタル技術の進化のスピードに翻弄され、デジタル技術とデザインの間を構築する間もなく過ぎ去っていったように見受けられる。こうした1960年頃から見られるようになったデジタル技術と建築の関係は、急速に進化するデジタル技術をハードとソフトの両面から追従していくことの連続であり、技術革新によってそれ以前のデジタル技術で構築したデザイン手法が無用なものとなることの繰り返しだった。

余談になるが、デジタル技術を専門に扱うプログラマの世界において35歳定年説が存在するほどに、技術革新の追従は困難である。この技術革新にまつわる問題はOSが標準化されるまで顕著に続き、それ以降もデジタル技術と建築の関係が醸成されるのを妨げる問題として引きずられてきており、歴史的な視点の欠落を余儀なくした要因でもあり体系化の遅れを招いた問題だともいえる。

□黎明期におけるデザイン応用

筆者は2013年頃に学位論文提出に際して、この時期に服部のいう「思考のアルゴリズム化」即ち、デザインの問題としてデジタル技術を建築に応用しよう

と試みた事例について調べたことがある。その時点で集めうる資料を当たった結果、建築設計へのコンピュータを導入する研究の日本での第一人者は清水建設研究所の太田利彦と佐藤庄一、京都大学川崎研究室の笹田剛史であった。

太田と佐藤は1965年頃から1970年頃にかけて建築学会などに設計段階におけるコンピュータ利用に関する研究を立て続けに発表している。笹田剛史は京都大学の大学院生であったころから学会等に論文を発表し、後に大阪大学にて教鞭をとって以降もこの分野を牽引し続けた。都市デザインの分野で最初にこのような試みを取り入れたのは、東京大学丹下研究室であった。1967年に都市計画学会に「URTRAN」の開発において、MITで開発された土木工学総合システム「ICES(Integrated Civil Engineering System)」を参考に、都市デザイン専用のコンピュータ言語の開発を行っていることを論じた。20世紀のマスターピースとも言われる代々木体育館を設計した丹下健三が都市を対象にデジタル技術を応用したことは意外に取られるかもしれないが、それらは東京計画1960から始まり大阪万博の会場設計に至るまで継続していた。

次回と次々回で、丹下健三研究室の一連のコンピュータ利用を、笹田が在籍し大阪万博のパビリオン設計においてコンピュータ利用を行っていた京都大学川崎研究室との接点を探りながら紹介したい。

豊橋技術科学大学大学院 准教授
M2A主宰
博士(工学)・一級建築士

水谷 晃啓



三重短期大学生生活科学科住居環境コース 出前授業

●開催日:2022年12月14日 / 2023年 1月18日

1年生後期の住宅設計課題への出前授業は2017年度から今回で6回目となります。2年目からは敷地や設計与件を提案し、担当教諭の木下先生と一体となって授業を続けてきています。今年度は授業指導をJIA三重地域会の出口基樹氏が担うこととなり、より地域会の主導感が増したよう感じました。例年、設計検討中に1回と作品完成時の講評に三重地域会5名が授業参加しています。学生さんは設計するのが初めてというのが大半です。私としては知識の少ない学生に、設計の自由さや多様さ、その建築を通して生活のしかたや社会の

仕組みを変えていく可能性があることを少しでも伝えられればと授業に参加しています。

こちらの知識を伝えるばかりでなく、学生さんの発想やそれぞれの関心ごと注目点が知れて、普段の仕事とは違った情報が得られます。学生さんの純粹、思うままに作った模型に本人以上に面白さを見つけられるといったことがいつも印象に残ります。今回はそれに加え3D-CADの活用について考えるきっかけとなりました。大半は手書きのスケッチで検討しているようですがCADを使う学生も居て、最近の使いやすくなった3D-CADを使え

ば、課題レベルの検討作業は格段に効率化し、手間の掛かる作図もなく複雑な平・断面図ができてきそうです。これからは課題の評価が難しくなりそうだと思うのと同時に自分の作業にも3D-CADの取入れを考えたいなりました。今回は数人、感想を寄せていただきました。少しは思いが通じているようで嬉しいところです。



服部 昌也 (JIA三重)
八武組

授業を受けた学生の感想

まささらの土地に1から家を建てる大変さを実感した課題でした。それと同時に、図面から模型まで条件の中ではありますが、自分でコンセプトを提案し、自分の感性や考えを活かした、「私だけの家」を作ることができたのが本当に嬉しいです。今回この作品を作り上げる際に、プロの建築家の方々からのエスキズ指導を受けました。この指導がより私の作品を磨き上げてくれたと思います。まだまだ未熟な私たちに、プロ目線からの適切な指導がたくさんあり、納得することばかりでした。それと同時に、自分の考えが甘いことを痛感した時間でした。疑問に思ったことを質問すると、優しく分かりやすいように教えてくださり、同時に建築の楽しさを教えてもらいました。家を建てる上で、条件の中で、自分の意見がはっきりあることが大切だと教えてもらいました。

発表当日、プロの方々から感想をいただきましたが、「あなたのその独特な感性を磨いたら、もっと良い作品ができますよ」と助言していただき、自分の感性を建築を通して理解していただいたことがこれから様々な設計をする上で、自信に繋がると思います。本当にありがとうございました。

池谷 美紅



▲中間個別指導

戸建て住宅設計の課題の中で、水回りの配置がなかなか決まらなかった為ご相談したところ、「部分的に見るのではなく広い視野で考え、いろんなパターンを提案してみると良い」とアドバイスをいただき、最初に決めた案だけに捉われないように再考した結果、今回の作品を設計する事が出来ました。

そしてなにより、実際に現場で設計されている方の指導を受けたことで、構造の規定や階段周りの空間の捉え方を新しく学ぶことができ、また一つ視野を広げる事が出来ました。

木下 雅功

今回2回にわたり、JIA三重の方々から直接ご指導いただきました。私たち学生の自由奔放な案を親身になって聞いてくださり、色々な経験を重ねてきた方々だからこそ説得力のある貴重なアドバイスもいただきました。他にも、自分のアイデアやデザインに特徴が似ている建築家を紹介して下さったおかげでより自分自身がしたかった設計が明確になり、行き詰まっていた問題も解決の手助けとなりました。

また、建物の機能性だけでなく図面についても見やすいレイアウトの仕方や、模型作りのコツも教えてくださり、とても勉強になりました。まだまだ知識不足な私たちに建築設計というものを分かりやすく教えてくださり、本当にありがとうございました。

西田 涼乃



▲作品発表・講評会

「建築というきっかけ」

●開催日:2023年2月4日 ●講師:永山祐子

2月4日、津市のアストホールに永山祐子氏をお迎えして建築文化講演会が開催された。講演は、最近作の写真を順に紹介しながら解説するという形で進められた。私は永山氏の作品についてあまり知識がなく初めて見る作品ばかりなので新鮮な気持ちで拝見した。

最初に『2020年ドバイ万博日本館』。白い立体トラスに三角形の幕が張られたファサードが映し出された。麻の葉文様の組子障子にヒントを得たというトラスと幕によって造形されたファサードがパビリオンを覆い来館者を迎える。

続いて東京都心に建つ超高層ビルの外装デザイン2件。『東急歌舞伎町タワー』では、高層ビルにありがちな単なるガラスの箱ではなく、しなやかで柔らかい噴水をイメージした。ガラスに特殊印刷を施し、その模様や角度を工夫することで水のキラキラした反射や白いしぶきを表現している。

2027年に完成予定の『トーチタワー』では、超高層ビル低層部の外装デザインを担当。周囲の街や広場とは無関係になりがちな超高層ビルの足元に空中散歩道を巻きつけることで都市と繋がる新しい体験をつくり出している。

これら3件に共通することは、いずれも設計の主眼が外観デザインにあることで、それぞれ外装の素材やディテール、スケールなどがモックアップ等で慎重に吟味され、光の反

射や透過による映像的効果などきめ細かな設計がなされている。ただ、建物の表層だけのデザインは、(パビリオンや商業ビルという用途上やむを得ないと思うが)舞台装置の書割のようで、写真やパースからはその建築的魅力が伝わってこなかった。

続いて前橋市の郊外型店舗『JINS PARK』。地域貢献型の眼鏡店にしたいという建築主の要望から、駐車場を建物の裏側にして前面道路側に広い庭をつくることで、地域のイベント等ができる広場を提案した。内部は、エントランスから大階段を介して青空が一望できる。大階段先の屋上テラスは小さい子供連れの母親が訪れた時に安心して子供を遊ばすことができる広場になる。「母親がリラックスできる場所があれば地域全体が幸せになれる」という女性建築家ならではの視点で提案されている。建築のプログラムやプランニング、周囲の街との関係、内部の空間構成が総合的に設計された永山氏の力量と細部にわたる気配りが十分伝わってくる素晴らしい建築である。

2014年にJIA新人賞を受賞された『豊島横尾館』は、古民家をリノベーションした横尾忠則氏の美術館。玄関の赤ガラスが美術館のテーマである「生と死」「日常と非日常」の境界を表現している。また、色彩情報を消す赤ガラスによって3次元の建築を絵画的な2次元表現に近づけることで建築と絵画が一体とな



永山 祐子 氏

る美術館を目指したという。この作品も写真ではその空間を想像し難く、機会があればぜひ実物を見てみたいと思う。

その他、住宅作品が2件紹介されたが、2件とも外観は装飾的なものがない普通の住宅だった。「住宅の場合は、商業ビルに求められている装飾的なデザインでなく質の高いミニマムな空間をつくりたい」という言葉通り内部空間の豊かさを提案したもので、商業ビルの表層デザインとは対照的でとても興味深かった。いずれの作品も、その用途や規模、周囲の環境によって自在にデザインを使い分ける柔軟さと、女性ならではのビジュアルなアイデアに満ちていた。

講演後の会場からの質疑では、設計の仕事をしている女性建築士から「家庭や子育てと設計の仕事との時間配分をどう両立させているのか」との質問があり、「妊娠出産の時も母親の協力やスタッフの手を借りながらなんとかやってきた。今はオンラインでのテレワークや遠隔技術が進んでいるので、女性であるが故のハンディキャップを乗り越えて男女平等に仕事ができる環境が整いつつある。そこは気にせず両立できる社会がさらに整ってくる」と励ましの言葉があった。女性建築家として第一線で活躍されている永山氏からの言葉だけに、ずいぶん勇気づけられたことと思う。



村林 桂 (JIA三重)
村林桂建築設計事務所

NAGOYA Archi Fes (NAF) 2023

卒業設計展 開催



最終審査会場に並べられたファイナリストの模型



学生のプレゼンをさく山本理顕審査委員長

2023年3月14日・15日、名古屋市中小企業振興会館(吹上ホール)にて、NAGOYA Archi Fes (NAF) 2023 が開催されました。JIA東海支部も協賛するNAFは、今年で10回目の開催となりますが、その前身である「dipcolle(2008～2013)」や、さらにその前の「東海地区卒業設計展(2004～2007)」から数えると、20年の歴史を数えます。最初の卒業設計展は、この地域でも学生主体となる卒業設計展を開催したいと、当時、中部大学に在籍していた五十嵐太郎さんの研究室の学生が中心となり、NAC(名古屋建築会議)の大学教授たちがフォローして始められたものです。

その後、名古屋周辺の多くの大学の学生が集まり、現在の形に発展しています。現在のNAFには約180名もの学生が集い、卒業設計展の企画はもちろんですが、レクチャー会や共同コンペ開催など様々な活動を行い、学生たちが主体的に学びあう場ともなっています。NAF卒業設計展は、コロナ禍の2020年からオンラインを併用するなど開催方法が制約を受けてきましたが、今年は、全面的に対面にて開催することができ、東海・北陸の10県から約90名の出品を得て、美しい図面パネルや大きな模型に彩られた会場は、多くの議論が巻き起こる賑やかな場となりました。

他の卒業設計展と異なるNAFの特徴は、2日間にわたり開催し、初日は建築周辺領域で活躍する方々を審査員に、2日目は全国から多世代の建築家を審査員に招いて、審査を行うという点にあります。審査員の構成や審査の方法は、実行委員が議論を重ね、毎年、趣向を凝らした方法で開催されています。

1日目は主として地元で活躍する若手の建築家やデザイナーなど20名の審査員を迎え、出品者が数名ずつのグループに分かれ、2、3名の審査員とともにグループでディスカッションした後、上位者がプレゼンを行い、全審査員が個人賞を贈るというユニークなものでした。2日間にわたり総合司会を務めた名城大学教授の生田京子さんは、初日の様子について「必ずしも建築設計ではない領域の審査員のみなさんが、幅広い視点で作品を捉えて頂いたのが印象的でした。例えば廃材利用とか建設残土処理の提案といったように、それぞれの審査員が共感を持つテーマに取り組んだバラエティに富んだ作品が個人賞に選ばれました。学生たちにとっても気づきが多かったのではないのでしょうか。」と語っています。

2日目は、山本理顕(委員長)、宇野求、榮家志保、藤村龍至、満田衛資の5名の建築家を審査員に招き、午前中、審査員が全作品を学生のショートプレゼンを受けて巡ったうえで、協議によりファイナリスト8名を選考し、午後、ファイナリストによるプレゼンと審査員による白熱した議論を経て、最優秀賞の福井大学・崎田真一朗さんによる「根源的機能建築」をはじめとする優秀作が選出されました。

生田さんは2日目の審査を通して次のように語っています。「委員長の山本さんをはじめ、建築家の審査員はみなさん作品のリアリティを強く求めていた気がします。実際、上位に選ばれた作品は、いずれも地域の課題に具体的な提案を持って向き合うものでしたし、設計の密度が高いものばかりでした。そして、藤村さんが公共的な場にこそ相応しい形を

残さなければいけないと主張していたように、最優秀に選ばれた『根源的機能建築』は、最も建築としての形にしていこうとする意志をもちつつ、人の行動があふれてくるような提案が審査員の心を掴んだのだと思います。一方、近年のNAFでは身近な地域の課題に取り組む作品が多くなっている気がします。馴染みのある場にリアリティをもって取り組むのはとても良いのですが、コロナ禍の影響もあるのでしょうか、やや内向的になっている気もします。NAFを通して大きな経験を積んだ出品者やスタッフの下級生たちが、より大きな視点をもって、次世代の設計に取り組んでくれることを期待したいですね。」

本企画の最大の享受者は、多くの審査員から直に刺激を受けた学生たちでしょう。この大変な審査会を運営したNAFの学生たちに敬意を表し、この活動が今後の活躍の糧になり、さらには地域の建築設計界の飛躍に繋がることを祈っています。

なお、審査結果の詳細等は、下記QRコードより、NAF2023のホームページにてご覧いただけます。



<https://www.nagoya-archi-fes-hp.com/>

恒川 和久 (JIA愛知)

名古屋大学大学院工学研究科・教授



自作自演

私の仕事

07

豊橋スカイ眼科

先日、「豊橋スカイ眼科」が豊橋商工会議所主催の第35回都市デザイン文化賞の荣誉に預かった。今迄東海地区を中心に医療福祉を専門として750軒の設計実績があるが今年で800軒を越す勢いで増え続けている。その中で我々が創る案件は街の中でシンボリックな位置にあり、ランドマークとして存在し続ける可能性がある。今回その評価された内容を抜粋して表記する。

『施主の好みを反映し、飛行機のイメージで全体をまとめている。航空会社を連想させるサインも相まって、一目で飛行機や飛行場を意識させるデザインで



はあるが、飛行機の形をそのまま真似るのでなく、大きな庇や斜めの壁により建築デザインとして飛行機の「流動感」「飛躍感」を表現している。敷地に隣接する公園への視界を意識して前面道路から公園に向けて敷地を一直線に貫く滑走路のような通路を設けており、強い個性を持つ建築ながら周辺環境にも配慮している。斜めの面が組み合わされる複雑なデザインを破綻なく仕上げている施工技術も評価される。』

上記のランドマークとしての医療福祉の建築は、人が居て暮らしがある場所であればどんな田舎でも存在し、街づくりの中での存在価値は高い。

今後は、街づくりを一緒に取り組んでいけるスタッフを全国に求め育て、Uターンして起業していく仕組みを構築していく。

長屋 榮一 (JIA愛知)

アートジャパンナガヤ設計



自作自演 256

JIAに加入し、わずかではあるが活動に参加してきた。その内の一つ名市大の講義「建築家の仕事」

僕は若いとき(今でも?)悩んだり考えたり行動に移せない性格で、同じ様な思いの学生が少しでもやってみようかなと思ってくれることを期待し、自分の学生時代の話をした。

レポートには、思いや悩みを赤裸々に書いてくれる子もいれば、スカイダイバーになるとふざけたものも。

最終講義、ふざけた彼はまた同じ事を書いてきた。だが自分の口で発表した時、本気なんだと感じた。

西川昌徳(まさやん)

とある工務店の社長から小中学生を引き連れ自転車で旅する人のことを知る。

歌って踊れる建築家

今回の旅は大阪→熊本。かつて大分に住んでいたの、その距離感は分かっている。自転車で行くような距離ではないが僕に性格が似ていると思っていた息子が聞く、「行ってもいいかも」と。

今まで趣味にしかならないと嘲笑された事も、突き詰めればSNSの発信力により生活できる。

スカイダイバーで建築家。まさやんみたいに好きな事で生きていく。カッコいいじゃないか。

設計は好き、死ぬ直前まで出来たら幸せと思っていた。だが学生と接した時、僕も当時歌って踊れる建築家になるとみんなで騒いでいたことを思い出した。

半世紀経った人生、息子の挑戦する姿。僕にも建築家プラス違う選択肢があってもいいのではないかと。



中川 竜夫 (JIA愛知)

アーキセイエ建築設計事務所



文化財保護法が「保存」から「活用しながら保存」の政策に大きく舵が切られている今日、住民が主体となり、常設型の地域交流サロンやイベント開催などでの活用を試みている旧木曾街道沿いの神社である。終戦直前の空襲により社務所は焼失したが本殿・拝殿は免れた。文献によると「宝永2(1705)年社殿修復の事あり、

本殿はもっと古い社と推察される」とある。従って建立は1600年代であろう。境内にある市指定の保存樹(楠、銀杏など4本、幹周4m強、樹高18m)の樹齢がわかれば創建時期がより正確に推定できるかもしれない。

本殿は流造で、堅固な石積の基礎上に建てられており数々の災害を乗り越えてきた。愛知

県は寺社仏閣数が本邦最多の地であり、多くは旧街道沿い、かつての「人のための道」にある。その保存と利活用を図る試みに、建築家が参画し貢献していくべきではないか。

職能集団の機関誌記事の一つ、「保存情報」は名称を変え、発信の姿勢を変えていくべき時代の到来である。



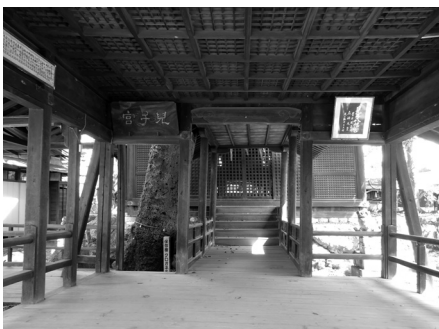
兒子八幡社境内



本殿・拝殿側面



地域交流の場として企図されている社務所



保存樹の根の隆起で傾いた舞殿と廊



【概要】

正式名称：八幡社(旧指定村社)
面積等：境内:569坪・本殿:流造5坪・拝殿:10坪
舞殿 社務所:50坪(「八幡社由緒」による)
住所：名古屋市北区志賀町1丁目65
建設年：宝永2(1705)年社殿修復の伝。それ以前と推察。
アクセス：地下鉄黒川駅より徒歩8分

【参考資料】

兒子八幡社由緒
志賀の里と川と街道



谷口元 (JIA 愛知)

編集後記

●今回は2022年1月号で編集後記を執筆しました。その時には、第6波を心配する反面、自粛の影響からリベンジ消費が始まったという話題、ワクチンだけでなく薬の承認が近いという明るいニュースも出始める一方、設計業界とはいえば、コロナ禍の影響で中止もしくは中断した多くのプロジェクトがそのまま、早く再開すること願うという内容でした。

あれから1年以上が過ぎ、コロナも収束に向かいつつあり、マスク着用も自己判断になりました。各プロジェクトも再開しましたが、今度は建設物価の急な高騰に悩まされる方が増えたのではないのでしょうか。一方、講演会もリモート中心からリアルが増えてきました。建築家の生の声を直接聞き、何を想い、何を大切に設計しているのかを感じ取れることは貴重な機会です。また、見学会

も増え、建築空間で感じるリアルな体験の重要性をあらためて痛感するこの頃です。

(富田 彰次)

●「コルゲートハウス、報告その4」川合健二さんの環境への思考と実践がダイレクトに表現されていて観るたびにメッセージを感じ、刺激を受ける素晴らしいコルゲートの住器です。人生観やライフスタイルがリアルに具現化されてる住まい手にとって理想空間である事にも感銘を受けます。健二さんご一家の住器と菜園、フードフォレストを継承されて「のこす・なおす・つかう」を着々と進める富田様に敬意を表します。コルゲートハウスの修繕、周囲環境の整備維持管理など、1500坪の施設公開への道のりは険しそうですが健二さんのライフスタイルが現代の消費社会への警鐘となり、サステナブルを再認識させてくれる情報発信の場になることに大いに期待します。そしてコロナ禍での制約も緩和傾向、

私はオンラインやデバイスの多用によるヒキコモリ(言い訳か?笑)とメタボ傾向の心身の体質改善が目下の課題です。(伊藤 彰彦)

ARCHITECT

第416号
発行日 2023.5.1 (毎月1回発行)
定価 380円(税込)
発行責任者 大瀧正也
編集責任者 恒川和久
編集 東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
株式会社イヅミ内
ARCHITECT 編集部
岡崎市明大寺町荒井10番地
TEL (0564)21-2657 FAX 26-1792
発行所 (公社)日本建築家協会東海支部
名古屋市中区栄4-3-26 昭和ビル
TEL (052)263-4636 FAX 251-8495
E-Mail : shibu@jia-tokai.org
http : //www.jia-tokai.org/

コルゲートハウス「川合健二郎」報告 その4

『建築家+』第3号の取材のために昨年11月30日、二川町(豊橋市)を訪れました。参加したのは、編集の寺井真理(マリベ)さんと、伊藤幸子(イトサチ)さん、編集委員長の上原さん、澤村さん、吉元さん、齋藤さんと黒野、JIA愛知『建築家+』編集委の面々です。富田正行・真知子ご夫妻が迎えてくれました。

コルゲートハウスは修繕工事中で、外装のハニカム窓の鉄部を遮熱塗装で下塗りの状態。「グレーのコルゲートハウス」が見られるのもこのタイミングならではの。なかなかモダンに見えます。仕上げは、元通りのオレンジ色になるそうです。

そのあとは、学生時代から実務まで修復に携わった澤村(前地域会長)さん自らの解説付きで、「二川本陣」と「駒屋」を見学しました。お天気は曇りでしたが、二川ツアー、とても充実した取材と視察になりました。この取材は、『建築家+』第3号にて掲載の予定ですのでお楽しみに。 黒野 有一郎(JIA愛知 地区連絡会豊橋)

コルゲートハウスを訪問して

私が初めて訪ねたのは、2007年の春のこと。新緑の木々の向こうに横たわる赤茶色の楕円の外観にまず衝撃を受けた。一方で中に入ると、落ち着いた生活空間がそこにはあって、とても不可思議な体験となった。そして、当時一人で暮らしていた花子さんからうかがう健二さんの奔放なエピソードや壮大なエネルギー構想もさることながら、花子さんの言葉の端々に感じる聡明さにも魅了された時間だった。日記に花子さんの言葉がメモしてあった。

「生きていくってことは食べること。」
シンプルだけど、畑を耕し果樹を育てる彼女から聞くと言説力があつた。今回の訪問で、富田さんたちがコルゲートハウスとその周りを「フードフォレスト」として開かれた場にされるという計画をうかがった。それと花子さんの言葉が重なった。未来を見据えつつ、地に足をつけた健二さんと花子さんの暮らしも、建物とともに引き継がれていくのだと思うと、とても嬉しいし、ワクワクしている。



伊藤 幸子
(編集者)

■プロフィール

編集者。名古屋市立大学大学院芸術工学研究科 鈴木研究室 修士課程修了。

建築や地域、ものづくり、ヘルスケアアートなどの周辺をうろろしながら、執筆やイラスト、事務局業などもやっています。「建築家+」1-2号編集も担当しました。



コルゲートハウスを訪ねて

コルゲートハウスを知ったのは学生の頃だからおよそ40年越しの初訪問となった。写真でしか知らなかったの、てっきり山の中に建っていると思っていたがすぐ隣に住宅街が迫っている。印象的な朽ち果てたポルシェはもう無かった。外壁廻りには足場が組み立てられ、改修工事が進んでいた。妻壁

の、錆びが膨らんで変形したハニカム構造のスチールは力強く叫んでいるかのようだった。内部はすっかり片付けられ、生活の痕跡、例えばペンダント照明とか造り付けのベッドフレームとか、がそこ此処に見られ、剥き出しコルゲートパイプは迫力満点。当時の姿を体験することはできないが、こ

こを引き継がれた富田さんたちによって生まれ変わった姿をぜひ見てみたい。



齋藤 正吉 (JIA愛知)
(株)ファンシエア
齋藤正吉建築研究所

『建築家+』vol.3 テーマは、「のこす・なおす・つかう」

JIA愛知で隔年発行しているフリー冊子『建築家+(ケンチクカプラス)』。今春には、第3号を発行する予定です。特集は、当初テーマの「建築の保存・再生」から一般向けにわかりやすくとうことで、「のこす・なおす・つかう」となりました。これから人口減少していく社会の中で新築需要は先細りとな

ることが予想されます。既存の建物を残し再生していくことの価値を考えていかなければなりません。コルゲートハウス解体の危機から、「フードフォレスト」事業へとつながられた建築家・富田正行さんらの取り組みは、今後の「のこす・なおす・つかう」活動への大きな道標となることでしょう。川合さ

んご夫妻の思いを、富田さんご夫妻がお引継ぎなされていることに畏敬の念を抱かずにはられません。



上原 徹也 (JIA愛知)
ファンズマイル
上原設計